

～ 弥生時代の高床式倉庫が出土した場所に～

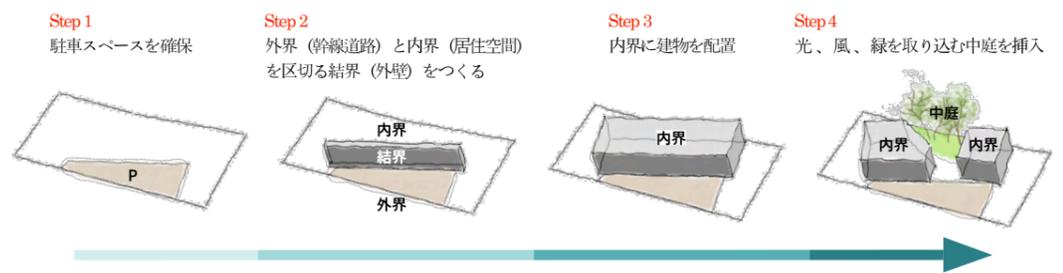
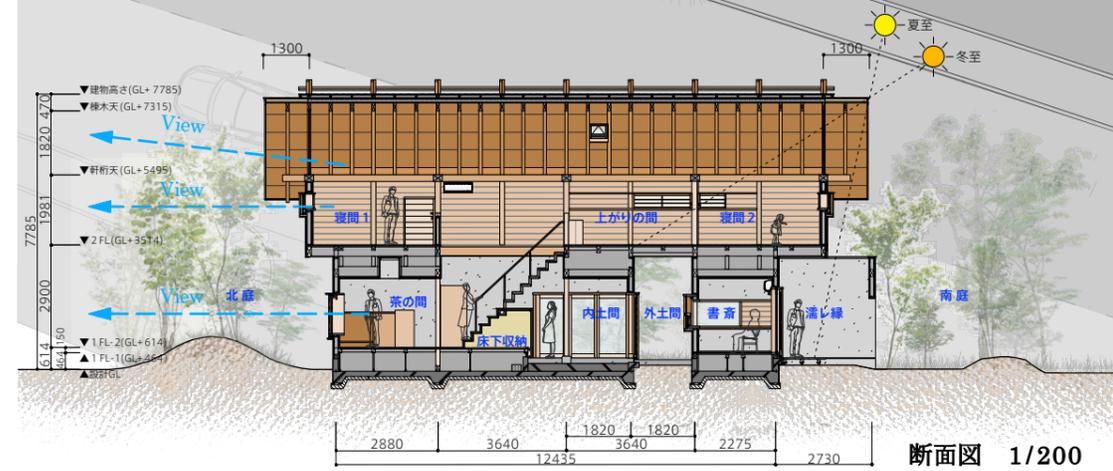
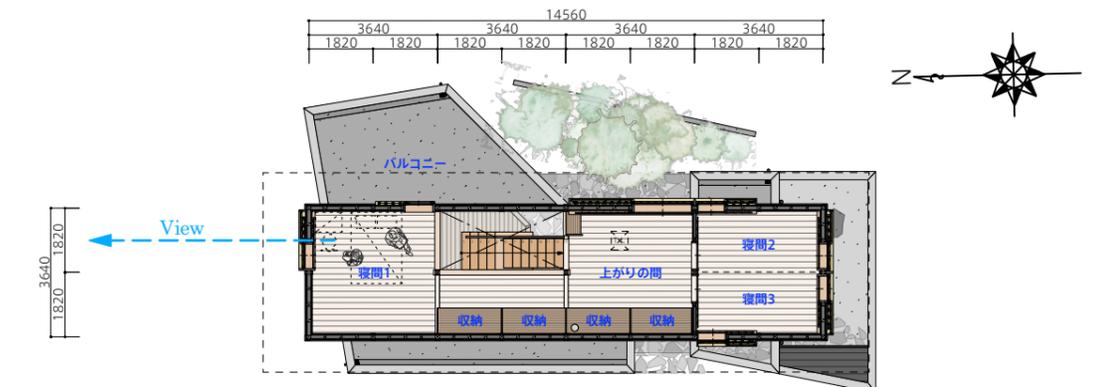
宮西の遺跡

敷地は、前面道路が幅員20mある交通量の多い主要幹線道路沿いにある。この場所で居心地の良い、落ち着ける住まいを成立させるためには、前面道路からの雑多な視線と騒音を調整する必要があると感じた。近隣には小学校があり、児童の通学路になっているため、通勤通学時でも安全に自動車の出入りがしやすい駐車スペースを、初めに計画した。転回しやすい駐車スペースを確保した上で、残された敷地に建物を計画するにあたり、駐車スペースの奥に、外界（幹線道路）と内界（居住空間）を分ける結界（外壁）を設け、それに沿うように水廻りと収納を配置する事で、茶の間、食堂、書斎といった居住空間から雑多な視線や騒音を緩衝する役割を持たせた。さらに、内界（居住空間）に光、風、緑、視線の抜けといった外との繋がりをつくるため、敷地の中央付近には外部空間としての中庭を設けた。1階部分は書斎を離れとし、駐車スペースから中庭までの外部空間を結界をくぐる山門のような玄関アプローチとした。

2階の寝室空間は、敷地の南北を貫く屋根架構を持った細長い形状が、1階の外壁とはズレを持って載ることで、様々な半屋外空間（軒下やバルコニー）を生み出している。結果、ふたつの岩の上に横たわった丸太のような、もしくは、弥生時代、この場所で実際に建っていたであろう高床式倉庫を想起させる佇まいの住まいとなった。

建築概要

所在地：愛知県安城市
 規模構造：木造2階建て
 敷地面積：316.63㎡
 述べ床面積：108.95㎡



中庭と2階へ視線が抜ける茶の間



2階の上がりの間と寝室



茶の間は中庭と北庭に視線が抜ける



洗面、浴室



キッチン



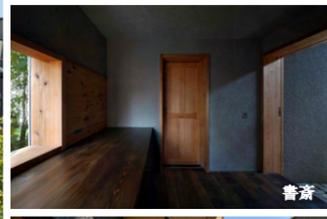
内土間。正面に北庭が抜ける



前面道路北側から建物外観を望む



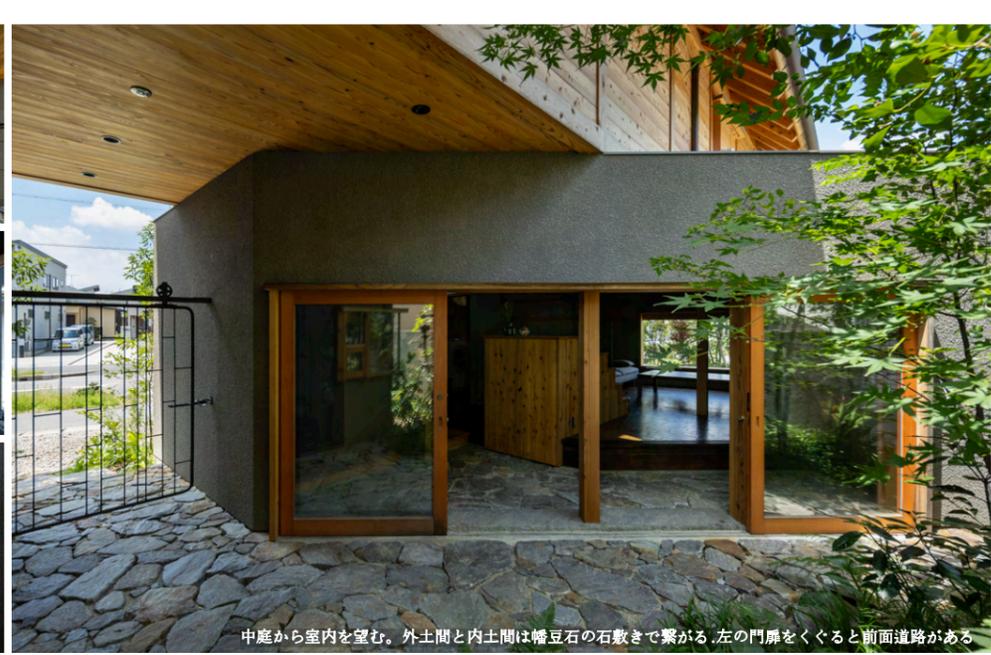
中庭から離れの書斎を望む



書斎



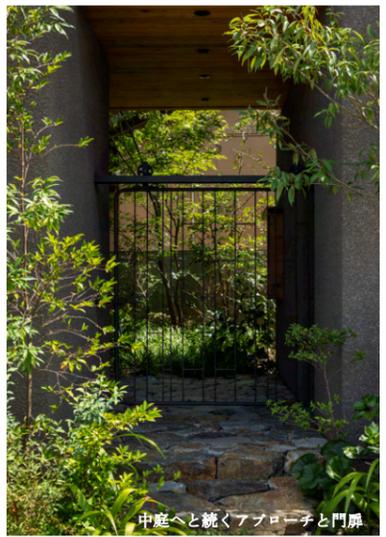
書斎南側の濡れ縁



中庭から室内を望む。外土間と内土間は幅豆石の石敷きで繋がる。左の門扉をくぐると前面道路がある



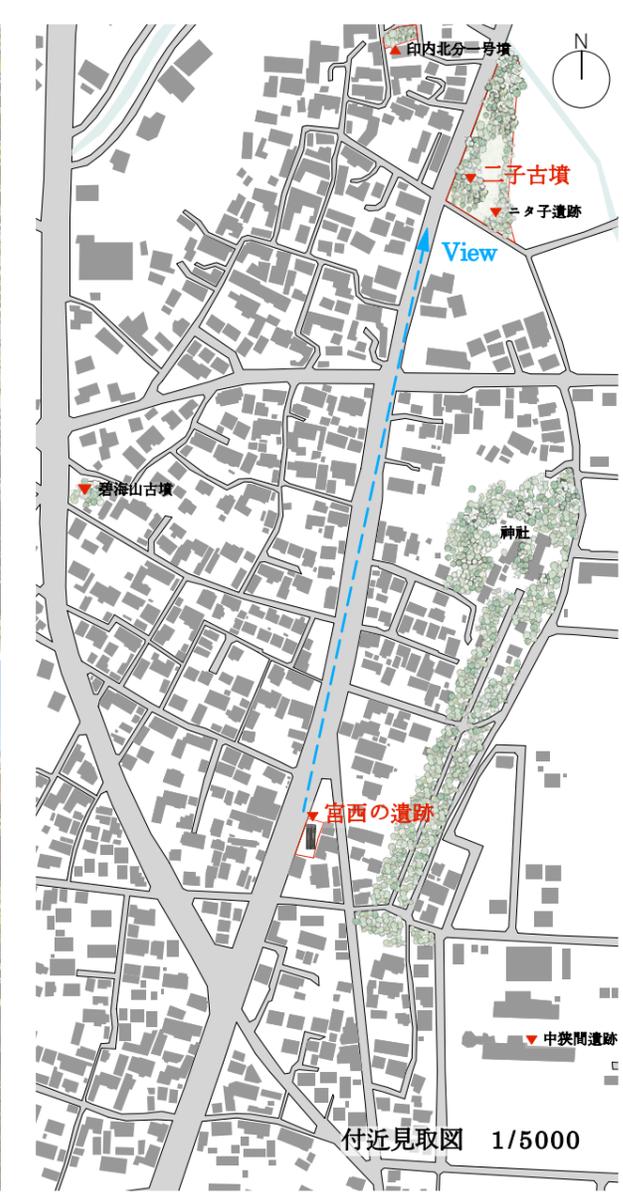
道路側から建物全体を望む



中庭へと続くアプローチと門扉



南側外観と南庭



付近見取図 1/5000



二子古墳(前方後円墳)



二子古墳
宮西の遺跡から二子古墳へと続いていく前面道路



敷地の上空写真



前面道路から望む宮西の遺跡

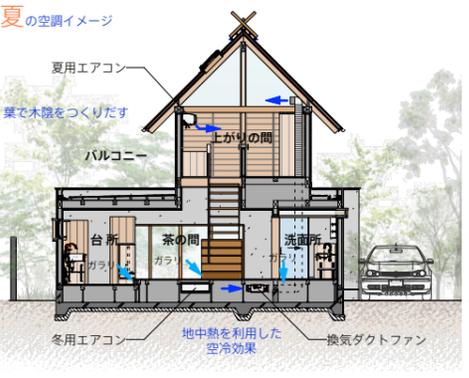
【温熱環境】(全館空調システム)



2階、夏用エアコンとダクトファン

床下は、収納としても使用できる

床下、冬用エアコンとダクトファン



夏の空調イメージ



冬の空調イメージ

【夏モード】(床下負圧状態)

階段吹抜にある夏用エアコンを稼働させ、土間スラブで更に冷やされた床下の空気を、ダクトファンで2階の天井付近の高さで放出する。

【冬モード】(床下正圧状態)

床下空間にある冬用エアコンを稼働させ、2階天井付近の暖かい空気を、ダクトファンで床下空間へ送り込み、床下エアコンでさらに暖められた空気を、床ガラリから建物全体に放出する。

【左官セルフビルド】



ネタ(材料)を攪拌する子どもたち

トイレ前の壁を塗装する施主家族

天井面も左官で仕上げる

職人顔負けの吉田祥吾氏

1階の壁と天井の珪藻土塗り仕上げを、施主家族、友人、設計者らで左官ゴテを使い、セルフビルドでの施工に挑戦した。天井面の施工は特に難しく、ネタ(材料)を床に落としながらも完成した仕上がり具合は、職人では出せない凸凹したコテ跡が、味のある表情となり、建物への愛着と貴重な経験が住まい手にも刻まれるだろう。

【発掘調査】



貯蔵穴か? 炉跡 炉跡

「竪穴式住居跡」の可能性

「高床式倉庫跡」の可能性

出土した須恵器の遺物

出土した高坏の遺物

井戸の発掘

発掘調査の様子

炉跡の発掘

愛知県安城市桜井町周辺は、埋蔵文化エリアに指定されており、縄文時代から既に人の暮らしがあった場所である。着工前に安城市の埋蔵文化課に依頼し、計画地内の発掘調査を実施。調査の結果、計画建物の基礎下から弥生時代の竪穴式住居や高床式倉庫の遺構、飛鳥時代の井戸坑のほか、古墳時代の須恵器や高坏などの遺物が出土している。